

Title	雜報
Author(s)	
Citation	地球 (1934), 22(1): 79-82
Issue Date	1934-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/184309
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ても日本の基礎をなす民俗習慣の遼遠さをする事が出来る。家のニワに大極小極、さてはニワウシがあり、庭クドの外にクドがあること、ナンドからザシキといった四間取の民屋は、恐らく開闢の初からの最古の文化の所産であつたであらう「ミノメノカキ」といふ三巾物の前垂は山城大原女の前垂と同じ衣裳であつてミノメの垣といふ意味であるらしい。壹岐の一般民家の食物及料理なども、中國や北陸との間に變化はない。田畑の神をまつるための玉串代用に、マサゴといふものをつる、葦苞の中に漬の小石をいれるのであつて、其形式は擬人的のものである、丁度それと同じ葦苞に小石をいれ、それを二つ合せて一つにしたものを近江の東部では一月四日山神にさし上げる。この滋賀縣の山の神は單に山のみ神でなくて、田の神であるから、祭に際して「五穀豐饒二十四のタナツモノ、皆シゲレ」と祝詞を申すのである、予はこれがいづ頃からか、山の神の行事となつたかを疑つてゐたのであるが本書をみることによつて壹岐では六月二十九日のナギシに祭る、その祭る場所はミト田又はカミ田に於てすると讀んで、ゆくりなくも、天之安田、天之平田、天のクチトヒ田で、皇祖が田をつくられた過去を追想し、日本の農民生活や農家の原流が開國の昔から悠久なるを感じさせられた、蓋し近江の山神や、壹岐の田神こそ日本最初の神々であつて、サカマキ、クシサシを天津罪といつて、それを人民の重大罪惡と考へた時代からの日本神であらせられるのではないか。壹岐で

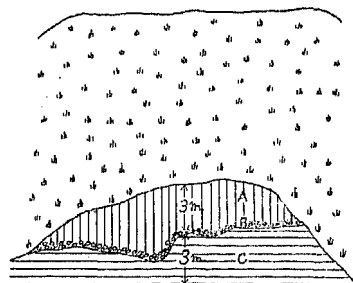
面白いのは小崎蟹と稱する一段身柄の低い純粹漁民の生活である。アワビの貝をとつて、これを皇祖にさし上げた民俗の名残であり、魏史に倭國のことを記して魚蛤が多く人民が水に沈むでこれを描ふことをのべた一派の生業者の名残であらう。しかし魏の使者がきたとき、海岸には蟹もゐたが陸上には既に田や畑の農業を營み、四阿の民屋に住んでゐて、田神や山神をまつるために、葦苞をつくる吾等の祖先は充滿してゐたものと斷ぜざるを得ない、最後に本書には壹岐の島人の徳川時代に交通した日本各國の港の表が出てゐて、何物がいかに取扱はれたかをのべてある、海島としての中繼貿易や、或は密貿易をやる大船の出入の面影をしのばしめるのが何よりの喜びであらねばならぬ。予はかうした面白い讀物を提供された著者に深甚の感謝をさしげる一人である。(藤田)

雜 報

○紀伊南部町堺の洪積層と第三紀層との不整合の露出に就て

紀伊日高郡南部町堺の洪積層及び其の化石は嘗て中村、黒田兩先生により報告されたが、當時は洪積層と基磐の第三紀層との不整合は化石産地では直接觀察出来なかつた。筆者は本年一月南部町堺並に西牟婁郡西富田村安久川の洪積世具化石の採集を行つたが其の際堺の化石産地に於て洪積層と第三紀層との不整合を直接觀察することが出

來た。紀勢西線の鐵道建設工事の爲に嘗て堺の海岸路傍に西南面した崖が新に削り取られたので化石産地で不整合が見られる様になつた。不整合の露出の狀態は圖に示す通りで、Cは田邊統西谷層の砂岩、Bは洪積層の基底礫で極く薄く直に泥層Aに移化する。切制の大部分は草に覆はれて居るので上の方は觀察出來ないが *Ostrea gigas Thunberg* が非常に多く處々密集し基底礫の間にもある。



paucauciæ Crose は見當りなかつた。 *Arca granosa* Liné 及び *Ostrea paucauciæ Crose* を特有とする竹山氏の下部層とは幾分 horizon が異なるのであらう。

○メキシコの煙草

(大炊御門)

一九一三年の百四十五萬六千ヘクタールに比較すれば四割二分の増加にして二百七萬八千ヘクタールなり、北アメリカ洲第一にして歐洲・アジア・蘭領東印度・アフリカ・南アメリカこれにつぐ順序にて、産出國としては米國・印度・ロシア・蘭領東印度・ブラジル及びギリシア等を擧げざるべからず、従つてメキシ

コの如きは物の數にも入らないのであるけれども、其氣候、土地の高低經緯度等變化の多い國であるから煙草產出の好適國であるから將來開拓の見込が多い、従前ヴェラクルス州サン・アンドレス・ツストラ地方は世界最秀と稱せらるゝ政局のヴェルタ・アパホにも匹敵すべき煙草を産し葉巻製としてオランダ・獨逸・白耳義又は英國に向け多量に輸出され一九〇〇年より一九一三年には二百六十萬担からを計上した、さうしてこの地方では黑色大桶のハバナラ或は暗黑色狭幅のタバスコ等の葉巻原料が栽培されたのであつた、所が煙草の嗜好が變つて味の重くるしいメキシコ葉に頓に需要を減じ一九三二年には僅に八萬担を輸出したにすぎない、世界の葉巻をはじめ巻煙草は主として淡色で味の軽い小形の葉を有する近東産類似のものである、そこでメキシコ在來の産は輸出向でなくなつて嘗てメキシコの好顧客であつたドイツでさへ十分一以下に需用が減少した、しかもメキシコ本國は煙草の輸入超過國である。これ全くメキシコの土人が科學的技術に基く有效なる栽培を爲さず歐米市場への進出を企てないことや、消費の多い煙草の品質に對する知識を缺く結果である、しかし、メキシコの人々がもつと眞面目に煙草を研究するならば將來は驚くべき煙草產出國となりうるであらうといはれる。

○獨逸の農村政策

一九三三年の獨逸の穀物收穫は數的にも質的にも好成績で總計二千五百萬噸以上となつたが、これは前年度獨逸の需用量二千五百五萬噸をカバーするのであ

る。ヒットラー政府の重要政策は色彩鮮明で、國家及民族と農村の關係を生物學的、國防的、民族文化見地より解剖し、農村は民族の血液的團結の柱石で、農民は國民全體の新陳代謝を健全ならしむる源泉であるとし、農民の土著性、家長主義的傾向は國家秩序の本質的要素との思想を宣傳した、農村負債の利子軽減と農村建築物維持修繕に對する政府の保證、關稅によつて農産物の價格の釣上げ、國產乾酪の保證等を行ひ、滿洲大豆に大なる影響を與へた、マルガリーン工業や脂肪工業の生産取締をなし、國內の脂肪經濟、特にバター生産者に有利なる地位を與へた、故に外國からの輸入バターは完全に防壓されたが、それだけ一般購買者の多大なる犠牲を要求し事實バタ三〇%、マルガリーン一〇%の暴騰となつた、滿洲の大豆の輸入禁止の代價も決して輕少ではなかつた、そこで政府は失業者に割引券を與へたが、更に鶏卵の輸入をも制限した、元來獨逸の農民は穀類を賣らない、農民の收入の六〇%乃至七〇%は全く畜産所得であるから、卵を輸入しないとそれだけ農家は値上りの利をうけたのである。

獨逸政府はさうした重要政策の外に獨逸農民層建設法なるものを設け、農村殖民を政府の專屬事業とし、土地世襲法を設けて、農民財産分散による家族制度の崩壊を防がんとし、長男の相続權確立と共に家族の他の人員に對する相続者の責任を明にしたるなど全く日本從來の制度に一致するのは極めて面白い現象である、其他農村の階級争闘を防ぎ、農民層の

建設を實行するために、農業、林業、果樹園藝、漁獵業等全般に亘り、其社會組織を農業大臣の所管にうつした、いろ／＼と改正をしたが、しかし農村の實狀は未だ容易に樂觀を許さず、特に農家の負債が病腫となつてゐて年々の利子は農産物全額の四分一強にも上るといふ有様である。

日本も農村問題が八ヶ間敷い、ことに中流農家の負債がいかにも農村疲弊の瘡となつてゐるが、どうか獨逸の實行をみて前車の轍をふまぬやうにしたいものである、あまりに重農は一般の經濟を利せざることとは、次節の通りであるからである。

○獨逸の國家經濟と其批判

ハンブルク、ブレーメ

ンの歐洲大陸以外に對する輸出入貿易關係業者を中心として組合をなせる東亞協會は一九三四年三月十日、ハンブルグにて懇親會を催したが席上シュミット博士の言によれば、獨逸國粹社會黨の政治革命實現せられて以來、民間は勿論國家の樞要機關につきたる新人中にも、兎角農村經濟を過重視するものが多いので食料品並工業原料品の自給を急激に促進せしめるために、獨逸工業品の取引先たる諸國よりの食料品輸入を急速度に制限したところ其反動作用が原由となつて、一九三三年以來獨逸の對外貿易は、世界工業國一般の輸出漸次好轉の兆を現はしたるに反して甚しく惡化したといふことである。

一時流行の自給自足主義といふものは好ましい結果を來さ

なかつた、勿論一九三三年度に外國品輸入制限によつて、獨逸農村の收入増加額は六億馬克に達したからそれだけ同年の輸出減退による國民の損失を相殺したといふ論者もあるけれども、輸出工業を中心とする對外貿易振興を考へる積極派の人々は巨額の對外支拂義務を擔ふ獨逸としては、輸出振興による外國際貸借の改善が出来ない、失業救済の立場から見ても、國內市況好轉からくる可能性は知れたもので、現在以上の失業者を減退するためには畢竟輸出振興に俟つ外ないとのべ兩派は極端に争つた、さうした結果輸入を極度に制限せんとする勢力甚だ盛んで、これを實行したところ、多年輸出超過に馴れた獨逸は輸出漸減といふ結果を體驗して、諸外國に對し心理的に硬化し、その原因を自己に求むる所無く、全く諸外國側の對獨措置がわるいのだと考へ、輸入制限を更に紡績や雜貨等の消費物資にまで擴大して益々經濟的閉鎖主義に向はんとした、しかしさうすれば獨逸の國家經濟はますます消極惡化するからといふので、シュミット博士は偏狹な經濟鎖國主義者に對し警告を與へ、輸出振興の必要を強調したといふことである。かうした競争のはげしい時代に於て、徒らに高率關稅政策に従ふといふことは危險である、日本では幸に國產獎勵農村振興といふことをやると同時に、輸入超過を意とせず盛んに原料品を入れて盛んに之を海外に賣り出す、どこまでも安價で之を世界に供給するといふ政策に出てやゝ成功しかけてゐる。恐らく獨逸も亦日本と同じやうに安

價な品物を供給するやうに努力してこの難關をぬけるであらう、つまり自分は先方の物資を買はないが、こちらの製品は買つてくれといつてもハイハイときくやうな御客は今時に居ない、原料を盛に輸入して、製品を盛に輸出するためには、たゞ一國內農村の復活を實行した位では間に合はなくなつたのが現代である、米穀問題、養蠶問題等、日本農村にも問題は多いが、識者は眞面目にこれに對策を立てねばならぬことと信じる。

○人絹の世界産額

一九三四年伊太利トリノ市で開かれた伊國人絹のスニア・ヴェスコ會社の總會で、同社長の云ふ所によると一九三三年の人絹は世界的に顯著な發展をしてみた、さうして不況も何も問題にせないで、一九三二年に二億三千四百萬疋であつたものが一九三三年に約三億疋に増加した。その内譯左の如くである。

白耳義	四、四〇〇疋	ポーランド	三、三〇〇疋
チエツコ	二、五〇〇	スペイン	二、三〇〇
フランス	二五、四〇〇	スイス	四、七〇〇
ドイツ	二七、七〇〇	日本	四三、六〇〇
イギリス	三八、一〇〇	カナダ	三、五〇〇
伊太利	三七、二〇〇	米 國	九四、二〇〇
オランダ	九、九〇〇	其 他	三、二〇〇
合 計			三〇〇、〇〇〇

果して然らば、米國について、日本は第二位であり、英、伊、獨、佛これにつぐ順序になつたのである。